

言語変異と言語変化：他動詞虚辞構文に対する汎時的分析の試み*

柳 朋宏

1. 英語変種における他動詞虚辞構文

本稿では、現代英語の地域変種に残る古法に対する文法性判断を初期英語に適用し、言語変異に対する共時的視点と言語変化に対する通時的視点の双方向から「他動詞虚辞構文」の統語分析を試みる。他動詞虚辞構文は、ドイツ語、アイスランド語などで観察されている現象であるが、同じくゲルマン語派に属する現代英語やスウェーデン語などでは非文とされている。(1) はアイスランド語の例である。

- (1) Það hafa margir jólasveinar borðað búaðing. [アイスランド語]
there have many Christmas trolls eaten pudding
'Many Christmas trolls have eaten pudding.' (Bobaljik and Jonas 1996: 209)

現代英語では非文だが、時代を遡ると、後期中英語から初期近代英語 (1390 年から 1600 年) では用いられていたことが報告されている (Cowper et al. 2019; Ingham 2003; Jonas 1996; Tanaka 2000)。

- (2) without these... Ther may no kyng ledegret lordship [14 世紀の英語]
without these there may no king leadgreat lordship
'without these, no king may lead great lordship'

(Robert Grosseteste, *The Castle of Love* / Tanaka 2000: 479; Cowper et al. 2019: 219)

- (3) the[r] schall no man betene bynde a messyng [15 世紀の英語]
there shall no man beatnor bind a messenger

'no man shall beat or bind a messenger' (Proverbs in MS Douce 52 / Tanaka 2000: 479; Cowper et al. 2019: 219)

アイスランド語と同様、後期中英語から初期近代英語でも他動詞虚辞構文が観察されているが、構文の特性は異なる。アイスランド語では、(1) のように助動詞と否定要素は義務的ではない。一方、中英語の例 (2), (3) では、法助動詞と否定名詞主語が含まれており、後述するようにこの 2 つは (ほぼ) 義務的である。また、古英語のノーサンブリア方言 (北部方言) から発達したスコットランド南部 (低地地方) の古スコッツ語) や、スコッツ人が移住したアイルランド北部のアルスター地方で話されているベルファスト英語、さらに大西洋を超えたアメリカ東部のアパラチア山脈地域で話されているアパラチア英語では他動詞虚辞構文が容認される。古スコッツ語、ベルファスト英語、アパラチア英語の例を、(4)/(5), (6)/(7), (8)/(9) にそれぞれ示す。

- (4) ...thar may na power do thaim dammage [古スコッツ語]
...there may no power do them damage

(DSL [= *The Dictionary of the Scots Language*], s.v. *power*, n. / Bernstein 2018: 123)

- (5) Thay will na man of judgement or learning mak difference betuix thir wordis
there will no man of judgement or learning make difference between these words

[古スコッツ語]

(DSL, s.v. *thar(e)*, adv. / Bernstein 2018: 127)

- (6) There has somebody read the book. [ベルファスト英語] (Henry and Cottell 2007: 282)

- (7) There might somebody have taken the cheese. [ベルファスト英語] (Henry and Cottell 2007: 282)

- (8) There can't nobody ride him. [アパラチア英語]

(Montgomery and Hall 2004 / Zanuttini and Bernstein 2014: 144)

- (9) They won't nobody know you're gone. [アパラチア英語]

(Feagin 1979: 241 / Zanuttini and Bernstein 2014: 147)

古スコッツ語とアパラチア英語では、(5) と (6) のように、代名詞 *thay/they* 'they' が虚辞として用いられることがある。人称代名詞の用法とは一致現象の有無などにより区別される。

アパラチア英語の例 (8)/(9) においても、法助動詞と否定的不定名詞が用いられている。アパラチア英語は、中英語と同じ否定呼応言語なので、(8), (9) の例で、助動詞の否定縮約形と否定的不定辞 *nobody* が共起しているが、非文とはなっていない。

2. 言語接触による他動詞虚辞構文の統語的借用

Cowper et al. (2019) では、Penn Parsed Corpora of Historical English から得られた他動詞虚辞構文の例を分類し、中英語の他動詞虚辞構文では法助動詞と否定要素の 2 つが (ほぼ) 義務的に用いられていることを示している。さらに、法助動詞と否定要素のいずれか一方が欠如している場合、派生は収束しないと論じている。

アパラチア英語の他動詞虚辞構文においても法助動詞あるいは定形助動詞は義務的である。(10) の例が示すように、助動詞がなく、語彙動詞のみの場合、他動詞虚辞構文は容認されない。

(10) a. *They nobody like him. b. *They nobody know you're gone.
(Zanuttini and Bernstein 2014: 149)

(11) a. *They/there like nobody him. b. *They/there know nobody you're gone.
(Zanuttini and Bernstein 2014: 154)

一方、アイスランド語にはそのような制約は存在しない。(12) では、語彙動詞 *borðuðu* 'ate' が用いられているが、法助動詞や定形助動詞は使用されていない。

(12) *Það borðuðu sennilega margir jólasveinar bjúgun.*
there ate probably many Christmas.trolls the.sausages
'Many Christmas trolls probably ate the sausages.'
(Zanuttini and Bernstein 2014: 154)

英語史において他動詞虚辞構文がなぜ使用されるようになったのかについて、これまで統語構造による分析が提案されているが、本稿では言語接触による他動詞虚辞構文の借用の可能性について触れておきたい。上述のように、古スコット語はノーサンブリア方言に起源をもつ英語変種である。古スコット語は、古英語・中英語のノーサンブリア方言（北部方言）と東中部方言と同じく、アイスランド語の起源である古ノルド語の影響を受けている。アイスランド語では他動詞虚辞構文が容認可能であることから、古スコット語やイングランド北東地域の英語では、古ノルド語の影響により、他動詞虚辞構文が借用された可能性が考えられる。ただし、前述のように、アイスランド語と中英語・古スコット語とでは、他動詞虚辞構文の特性に違いが観察されており、当時の英語にはアイスランド語の他動詞虚辞構文の統語構造をそのまま借用するための素地はなかったと考えられる。

言語接触による当該構文の統語的借用の可能性について写本間の相違から検討する。13 世紀前半に書かれた *Ancrene Wisse* (*Ancrene Riwe*) の写本の 1 つ Corpus Christi College Cambridge, MS 402 [A] は、その言語的特徴から西中部方言で書かれたと考えられている (Hasenfratz 2000: 20)。一方、別の写本 Cambridge, Magdalene College, Pepys 2498 [P] は 14 世紀後半に東中部方言で書かれた写本である (Markus 2010)。Innsbruck Middle English Prose Corpus (Markus 2010) に含まれる *Ancrene Riwe* の 2 種類のコーパス（写本 A と写本 P）を予備調査した結果、写本 A には他動詞虚辞構文はなかったが、写本 P には (13) に挙げる例が見つかった。

(13) For þere schal neuer man wel serue god ne kepe hym out of synne.
for there shall never man well serve God nor keep Him out of sin
'Man shall never serve God well nor keep Him out of sin.'
(ANCPEPYS, p. 65, r5)

古ノルド語からの借入語である *fro* 'from' は写本 A では 1 例のみだったが、本来語である *from* は多数観察された。これに対し、写本 P では *from* も用いられていたが、*fro* 'from' も同程度使用されていた。このことから、写本 P に古ノルド語の影響があったと考えられる。

3. まとめ

本稿では、他動詞虚辞構文を取り上げ、通時的視点と共時的視点を組み合わせ、汎時的考察を試みた。言語の史的統語分析における文法性判断の欠如という問題点に対し、当該の構文が残っている英語変種における文法性判断を活用することで、理論分析の妥当性を示すことができる可能性を示唆した。また、言語接触による他動詞虚辞構文の統語的借用の可能性について論じた。

参考文献 [一部]

Bernstein, J. B. (2018) "An Effect of Residual T-to-C Movement in Varieties of English," *Word Order Change*. / Bobaljik, J. D. and D. Jonas (1996) "Subject Positions and the Roles of TP," *LI* 27. / Cowper, E. et al. (2019) "Illusions of Transitive Expletives in Middle English," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 22. / Henry, A. and S. Cottell (2007) "A New Approach to Transitive Expletives: Evidence from Belfast English," *ELL* 11. / Jonas, D. (1995) *Clause Structure and Verb Syntax in Scandinavian and English*. PhD dissertation. / Tanaka, T. (2000) "On the Development of Transitive Expletive Constructions in the History of English," *Lingua* 110. / Zanuttini, R. and J. B. Bernstein (2014) "Transitive Expletives in Appalachian English," *Micro-Syntactic Variation in North American English*.

* 本研究の一部は科学研究費補助金基盤研究 B（代表：時崎久夫・課題番号：20H01269）と中部大学特別研究費 A（課題番号：20L02A1）の補助を受けたものである。